

(雜錄) ○キジバトと家鳩の交配未だし: ○截頭類

い。又未だその資格もあるまい。何故ならばいふ迄もなくこういふ事の決定は材料が唯一疋ではその特徴が個體差異であるかも知れず又雌雄間に矢張り外的差異が存在するのかも知れず或は又同一年齢でも雌雄の形や大きさに違ひがあるかも知れず其他未だ我々の知らない事などが實際あるのであらうからそれはすい分冒險な事だと思はれるからである。つまりこれは材料や調査の不足に基づく残念な事であらうと思ふ。けれ共自分はこの一疋を見てそしてこの差異を認めて又日本と支那との地理的關係も考へてどうも日本のハンザキと支那のとは別種としてもよい、した方がよくはあるまいか、といふ考へに傾いて居る事を申したい。

支那ハンザキは僅か一疋而かもそれが雌であつて自分が比較の爲めに測つて見た他の五疋の日本ハンザキはその中一疋を除く外皆雄であつたので具合が悪かつた。其等の體長を試みに擧げて見るならば三尺六寸餘(♂)、二尺五寸餘(♂)、二尺弱(♂)、一尺三寸餘(♂)、一尺九寸五分(♂)である。この中の唯一疋の雌は小さくはあつたが頭部だけの恰好の比でなら中々他の大きな雄に負けないう位頭幅は廣く見られた。

支那にもハンザキは方々に澤山棲息して居るのによく分つてゐないといふのは残念な事である。支那の石川先生は居ないか。切に新しい支那動物學者諸君の奮起を希望してやまない。

以上記して御參考に供し併せて御高教を仰ぐ次第であります。  
(小山準二)

### ●キジバトと家鳩の交配未だし

余は先年報じ置きたる如くキジバトと家鳩の交配種を得ばやと欲し、更に其籠を大形となし雌も數度替へて見たるも、雌によりては如何にしても順まざるものありて容易に目的を達すること能はず、現今配遇し置くものは漸くにして得し所のものにして、又曾て數度育雛をもなせしものなるも、昨春より昨夏にかけて三回産卵し抱卵せるも一回だに孵化を見ず、多くは、一週間より十日位にして抱卵を止むるに到れるを見たり。

よりて其卵を検するに盡く無精卵なりしを見たり、之によりて之を見ればキジバトの雄と家鳩の雌とは受精力のなきものか、又は籠養の爲め受精に障礙を生せるかの二ツの原因何れかにあるものゝ如けれども、尙ほ今後如何なる事の出で来るやを見んと欲するものなり。

此實驗に於て猶ほ感じたることは、雌鳩が抱卵に當り、一週間又は十日間位にて抱卵を止むるを見れば、鳩は(少なくとも家鳩のある者は)抱卵の成功不成功を中途にして豫め知れるもの如く思はるゝことなりとす。  
(小山海太郎)

### ●截頭類

(珍奇動物其九)

截頭類 (Ternnocephala, Ternnocephaloides) は或學者に

よつて扁形動物中の渦蟲類と吸蟲類との中間に立つ獨立の綱と見做されて居る比較的少數の屬種を含む群である。淡水の蟹、蝦、龜、貝等に吸着して居る小形の動物で、全世界に広く分布して居るが、殊に濠洲地方に最も多く、次で南米よりも數種知られて居る。又歐洲に一種、我國にも一種産する事が分つて居る。

●●●●●●  
 體制—長さ〇・五—五耗位、幅〇・五—二耗位の小動物で、扁平卵形を呈し、體の前端に指狀の觸手を具へ、後面後端に大きな吸盤を持つて居る。背面は少しく高まり、腹面は扁平若しくは稍凹み、背面側方に排泄器の開口、腹面觸手の基部に口、之より遙に後方に生殖口がある。色は乳白、紅、黃褐等種類によつて違ふ。

外皮にはクチャクラがあると云はれて居る種もあれば、無いと云はれて居る種もある。假令あるにしても極めて菲薄である。そして之に纖毛の生じて居る事を觀察された場合がある。上皮は *syncytium* の狀を呈し、細胞の境界を認める事が出来ない。筋肉は環狀、斜行、縦行等がある。神経系中、脳は口のある附近の背面にあり、之より前方には觸手に向つて多數の神経を出し、又後方には三對の主幹が走り、此等主幹の間には若干の横連絡がある。腦の前背方に一對の眼があるが、其構造異盤吸蟲類に一般にある者を似て居る。

口は前述の如く腹面前方、觸手の基部にあるのが通常であるが、歐洲産の *Scutariella* と印度及吾國に産する

(雜 錄) ○キンバトと家鳩の交配未だし ○截頭類

*Curidanicola* は殆んど體の前端に開いて居る。口を入れれば咽頭があり、次に短い食道があつて腸之に續く。腸は單一の幅の廣い囊で、例外的場合に僅かに分枝の形跡があるのみで、此點に於て棒腸類に似て居る。排泄器の開口は背面の體縁に近い處であるが、開口より入ると囊狀の部分があり、次に之に續く主幹があつて、此主幹は前後に向ふ二本の枝管に分れ、枝管は更に細かく枝を分つて居る。排泄管は總て特殊の細胞の相連る者の中を貫通した者で (*intra-cellular*)、此管の終りの部分は明瞭でない、然し恐らく氈毛細胞に終る者であらうと云ふ。又實際或種類では氈毛細胞の存在する事が知られて居る。尙主管及之に續く排泄囊の内面には氈毛の生えて居るのが見られる、排泄系中此二の終端部は多分外皮の陥入によつて生ずる者であらうと云ふ。前に擧げた歐洲及東洋産の二屬には排泄囊を缺いて居る。

截頭類は總て雌雄同體で、一般扁形動物と等しく複雑な生殖系を具へて居る。生殖腔は腹面中央線の後方に開き、雌雄の生殖系に連絡する。雄生殖器中精巢は二對、腸の後側方に位置し、其後方の者より輸精管が一本宛出て相會し貯精囊に開く。貯精囊より一本の射精管出で、交接器を貫通して其終端に開口す。交換器はキチン質の管狀をなす *Cirrus* をなし翻轉して生殖口より突出する。交接器の基部には一個の小形の附屬囊がある。雌生殖器中卵巢は一個、球狀を呈し、之に續いて輸卵管及卵成腔

(新著紹介) ○昆蟲學汎論

(Ootype)がある。卵成腔の基部には數個の囊狀の受精囊附屬し、又卵黄腺の開口がある。卵黄腺は腸の附近に廣く分布して居る廣大な腺である。尙此外卵成腔に開く腺(殼腺等)がある。又卵巢の基端に續く吸收囊 (Vesicula resorbens)と云ふ囊があるが、之は多分餘剰の精液や腺の分泌物を吸収する作用を持つて居る者であらうと云ふ。

右體制に關する記事は主として *Tennocephala* 屬に就て記述した者で、殊に H. MERTON (*Abh. Senckenb. Naturfs. Ges.*, 35 Bd., 1914)に據る處が多い。此人の業績は從來の者の中最も良く且新しい者である。又此屬以外の諸屬に就ては詳しい内部構造等は餘り分つて居ない。

分類上の位置—右記した處によつても分る通り、截頭類の體制には吸蟲類と共通の性質もあれば、又渦蟲類に近いと思はれる點もある。それで曾ては蚯蚓や蛭の仲間に入れられた事もあり、又外部寄生吸蟲類中に置く學者も多くあるが、近頃の研究者例へば BENHAM, HASWELL, MERTON 等は渦蟲類と吸蟲類との間に置かるべき獨立の綱と見て居る。MERTON によれば外皮及之に附屬する腺、消化器、生殖器は棒腸類に近く、筋系、神経系、感器及排泄系は異盤(外部寄生)吸蟲類に似て居ると云ふ。發生は HASWELL が *T. fasciata* に就て研究したが、其結果は形態の方から見て近似して居ると見做される棒腸

類や異盤類の何れとも可なり違つて居ると云ふ。種類—截頭類を分類すると大凡左の様になる。

- 科 *Tennocephalidae*
- 屬 *Tennocephala* 十八種…其中八種アメリカ、一種マダガスカル、九種濠州及ニュージランド、及印度地方
- Craspedella* ……*C. spenceri* HASW. 濠洲
- Actinodactylidae*

- Actinodactylella* *A. branchardi* HASW. 濠洲
  - Scutariellida
  - Scutariella* ……*S. didactyla* MRAZEK ダルマチア
  - Caridiniola* ……*C. indica* ANNANDALE 印度及日本
- 科及屬の分ち方はアナンドール氏に従つたので、MONTICELLI は更に此上に二つ屬を認めて居る。

吾國に産すと知られて居るのは *Caridiniola indica* ANNANDALE で産地は琵琶湖、カンエビ (*Abysphura campressa* D. H.) に寄生する者、川村學士の『淡水生物學』上巻一六三頁、二四六圖に記されたのがそれである。

*Tennocephala*, *Actinodactylella* はベーカー・ハムエルの教科書等に圖が描かれて居るし、又 *Caridiniola* は前記の『淡水生物學』に概形が描かれて居るから、茲に圖を出す事を略する。

新著紹介

●昆蟲學汎論 下卷 三宅博士著

(駒井 卓)